

有間皇子と大津皇子

——『日本書紀』と『万葉集』における造形の相違——

土佐 朋子

〔抄録〕

有間皇子と大津皇子は謀反事件で命を落とした二人の皇位継承候補者である。『日本書紀』は、有間皇子謀反事件を、斉明天皇という統治者としての資質に欠ける天皇の時代であった故に起こってしまった事件だとする考えを示している。『万葉集』の有間皇子歌群では、有間皇子のもとされる自傷歌が起点となり、結び松をもう一度見ることが望みながら果たせないまま、旅の途中で死んだ皇子として形象化されている。一方、大津皇子謀反事件については、『日本書紀』は、知的で硬派なエリートである大津皇子が、多くの知識人を誣誤して起こした内乱であり、それを平定した持統天皇も理想の天皇として更に強固な権力を握ること

になった事件として意味づける。それに対して、『万葉集』の大津皇子歌群では、秩序や常識よりも自らの欲望を優先する自由奔放、大胆不敵な性格で、そのために命を落とすことになったが、同時に他者とりわけ女性の心を掴んだ大津皇子像が描かれている。『日本書紀』の有間皇子、『日本書紀』の大津皇子、『万葉集』の有間皇子、『万葉集』の大津皇子は、それぞれの理解に基づいて、異なる造形がなされている。

キーワード…大津皇子、有間皇子、『日本書紀』、『万葉集』、謀反

一、はじめに

有間皇子と大津皇子は、しばしばまとめて「悲劇の皇子」として採

り上げられる。どちらも、皇位を継承してもおかしくない尊貴な身分でありながら、謀反の罪に問われ、若くして命を落とす。しかも、この「謀反」に関する『日本書紀』の記述には疑問も多く、謀略だった

のではないかとの想像をかきたてさせるところがある。そのため、二人は、まだ若く、将来有望でありながら、権力によって謀反の罪を着せられ命を絶たれたという共通性に注目が集まり、二人まとめて「悲劇性」という枠組みの中で論じられる傾向にある。

しかし、『日本書紀』と『万葉集』における二皇子に関する記載内容を比べてみると、事件の描写や人物の造形の仕方に違いが見られる。『日本書紀』では、有間皇子の謀反については謀議、発覚、処刑の経緯と状況とが具体的に記されるのに対して、大津皇子の謀反については、謀反、発覚、逮捕、賜死という経過は時系列で記されるものの、大津の何が謀反とされ、どういっさきかけで発覚したのかという具体的な経緯については記されていない。人物像についても、有間皇子については悪賢い性格だとされるのに対して、大津皇子のことは「詩賦の興り」とまで述べてその才能の高さを称揚する。『万葉集』においては、有間皇子歌群は、有間皇子本人の歌と後世の律令官人が詠んだ歌で構成され、後世の人々の興味関心は「結び松」に焦点化されている。それに対して、大津皇子歌群は有間皇子歌群には一人も登場しなかった女性が登場する。姉である大伯皇女との別れ、石川郎女（女郎）をめぐる三角関係が描かれ、大津皇子は女性たちに愛情を注がれた皇子として印象づけられる造形となっている。『日本書紀』『万葉集』に見えるこのような相違は、有間皇子と大津皇子とでは、興味関心が寄せられる点や抱かれるイメージが異なっていたことを示していると考えられる。

本稿では、『日本書紀』と『万葉集』それぞれにおける二つの謀反

事件の描かれ方の「差異」に注目し、有間皇子と大津皇子の造形の相違を考察してみたいと思う。

二、「陽狂」する有間皇子

次にあげるA『日本書紀』齊明天皇三年（六五七）九月条には、有間皇子が謀反を起こす前年に、病と称して牟婁の湯に静養しに行ったという。

A 有間皇子、性黠くして陽狂す、云々。牟婁温湯に往き、病を療むる偽して来、国の体勢を讚めて曰く、「纔彼の地を觀るのみに、病自づからに蠲消りぬ」と、云々。天皇、聞しめして悦びたまひ、往きて觀むと思欲す。（『日本書紀』齊明天皇三年九月条）

「黠」は、『日本書紀』の古訓では「サトシ」と訓まれているが、『説文解字』黒部に「黠、堅黒也、从黒吉声」、『広韻』入声「黠韻」に「黠、慧也、又堅黒也」、『篆隸万象名義』黒部に「黠、核扎反、慧」、『漢書』趙充国伝の「以尤桀黠、皆斬之」に対する顔師古注に「黠、悪也」とあり、「黠」は「慧」と「悪」という両義的な字義を持つ。故に、「性黠くして」は「悪がしこい性格で」（『新編全集』）と訳される。

『日本書紀』には、この「黠」字が、Aの「有間皇子、性黠くして陽狂す」の他にもう一箇所、神武天皇即位前紀戊午年十一月条の「兄

磯城は「黠き賊なり」に用いられている。『日本書紀』の兄磯城は、神武天皇に服従することを拒み、天皇の使者である八咫鳥に弓を引き、天皇の意を受けた弟磯城の説得にも応じようとしない。そのような兄磯城をどのように攻略しようかと相談を持ちかける神武天皇に対して、諸将は、武力を用いる前に、まずは弟磯城に説得にあたらせ、兄倉下と弟倉下にも説得にあたらせることを勧める。これは、兄磯城が損得勘定のできる知力の持ち主だと見なされていたことを示すだろう。天皇に服従しないという点では「悪」だけれども、知力をめぐらせる点では「慧」という両義性を帯びた兄磯城像を「黠」語で表している」と推察される。

『日本書紀』は有間皇子が「性黠」で「陽狂」したと言う。『史記』殷本紀に「箕子懼れ、乃ち詳狂して奴と為る」とあり、この箕子が陽狂した典型的人物として挙げられることが多い。⁽²⁾ 箕子は、殷の紂の淫乱がエスカレートし、諫言する臣下を残酷に殺害するのを目の当たりにして恐れ戦き「詳狂」（「詳」は『新釈漢文大系』に「佯の古字」とある）したとあることから、「佯（陽）狂」は狂ったふりをして暴君の圧政から身を守る賢者の処世術を意味する語として用いられる。一例を挙げれば、『文選』の鄒陽「獄中上書自明一首」に「昔、玉人は宝を献ずれど、楚王は之を誅す。李斯は忠を竭せしも、胡亥は極刑にす。是を以て箕子が陽狂し、接輿は世を避く。此の患に遭はんことを恐るればなり」、また東方朔「非有先生論」の「接輿は世を避け、箕子は被髮して佯狂す。此の二子は皆、濁世を避け、以て其の身を全うせる者なり」などが見られる。箕子と一对にされる接輿は、

『論語』微子篇の「楚の狂、接輿、歌ひて孔子に過りて曰く、鳳よ、鳳よ、：何ぞ徳の衰へたる」でよく知られる。『漢書』東方朔伝の「下は接輿を察る」に対する顔師古注「楚の狂、接輿、陽狂して跡を匿す」などから、接輿もまた狂気を装うことで俗世を避けた「陽狂」の人物として認識されたことが分かる。『文選』の例では、箕子や接輿が、「濁世」を避けて生き延びるために「陽狂」した人物として併称されている。「陽狂」は、権力と対峙する知識人が、真価が見出されない汚濁の世を生き延びるために選択する振る舞いであった。しかし一方で、それは俗世間から見れば「逃亡」に過ぎないし、本当は狂っていないのに「狂ったふりをする」というのは「嘘つき」だということになる。賢者であると同時に、逃亡者でかつ「嘘つき」だ、見る立場によってそのような二面性を持つ行動だったとも言える。有間皇子の性格が、「黠」という両義的な意味を持つ語で表されるのは、「陽狂」という行動の持つこの二面性に拠るのだろう。

Aでは、「陽狂」した有間皇子は療養するふりをして牟婁湯に行き、「その場所を見ただけで、病気は治ってしまった」と言い、齊明天皇はそれを聞いて喜んで、自分も行ってみたいと思ったという。ここに描かれる齊明天皇は、有間皇子の言葉を額面通りに鵜呑みにし、その真意を推し量ろうとするそぶりすら見せない。真相を見極めることには無関心で、個人の興味関心と欲望とに終始する天皇を、理想の統治者とは言うことはできない。ここからは、いかにも王としての資質に欠ける齊明天皇像が浮かび上がる。『日本書紀』はAにおいて、有間皇子を慧にして悪という両義的な性格を持つ皇子として造形すると同

時に、齊明天皇を王としての資質に欠ける凡庸な天皇として造形しているのではないだろうか。

三、牟婁の湯への護送と処刑

それから約一年後の齊明天皇四年（六五八）十月十五日、齊明天皇は紀（牟婁）の湯への行幸を実施した。前年の記事Aを受けた行幸だと考えるのが自然であろうから、齊明天皇は自らの欲望を実現したということになる。齊明が帰京するのは翌年正月三日である。『日本書紀』は、その約二ヶ月半の滞在期間中の、十一月三日から十一日にかけての事件として有間皇子の謀反を記述している。

B 留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰く、「天皇、治らす政事に三失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚む、一なり。長く渠水を穿りて、公糧を損費す、二なり。舟に石を載せて、運び積みて丘にす、三なり」と。有間皇子、乃ち赤兄が己に善しきことを知りて、欣然として報答へて曰く、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり」と。
（齊明天皇四年十一月三日条）

C 有間皇子、赤兄が家に向き、樓に登りて謀る。夾膝自づからに断れぬ。是に、相の不祥を知り、俱に盟ひて止む。皇子帰りて宿る。是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣し、宮造る丁を率ゐて、有間皇子を市経の家に囲ましめ、便ち駅使を遣して、天皇の所に奏す。
（十一月五日条）

D 有間皇子と守君大石・坂合部連葉・塩屋連鯛魚とを捉へ、紀温湯に送る。舍人新田部米麻呂、従なり。是に皇太子、親ら有間皇子に問ひて曰く、「何の故にか謀反けむとする」と。答へて曰く、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」と。
（十一月九日条）

E 丹比小沢連国襲を遣して、有間皇子を藤白坂に絞らしむ。是の日に、塩屋連鯛魚・舍人新田部連米麻呂を藤白坂に斬る。塩屋連鯛魚、臨誅れむとして言はく、「願はくは、右手をして国の宝器を作らしめよ」と。守君大石を上毛野国に、坂合部葉を尾張国に流す。
（十一月十一日条）

B では、留守官蘇我赤兄が、有間皇子に対して齊明天皇の失政三点を論う。有間皇子はこれに自分に対する蘇我赤兄の好意だと受け取り、嬉しくなって挙兵を口にする。蘇我赤兄の論いが、たとえ中大兄皇子の指示によるものだったとしても、現実とかけはなれたものであれば、説得力を持ち得ないはずである。赤兄の指摘が社会の共通認識に外れるものであれば、同意されるはずがなく、策略を疑われるのが落ちである。有間皇子が赤兄に同調したということは、蘇我赤兄の論いは、齊明天皇に対する社会的評価とさほどずれるものではなかったということになる。

C に記される赤兄の行動によって、**B** の赤兄の齊明批判が有間皇子を謀反の首謀者に仕立て上げるためのそのおかしであったことが明らかになる。**D** に記される有間皇子の中大兄皇子に対する返答、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」からは、謀略であったことに有間皇子

は既に気付いていて、かつ赤兄自身が独断で勝手に仕組んだものではないと推察していることが窺われる。赤兄の背後には「天」に匹敵する大きな力が働いている。有間皇子が「天」と言う大きな力は、斉明天皇という権力者であろう。たとえ実質的な権力を握っていたのが中大兄皇子であったとしても、それを許しているのは斉明天皇である。

Eには、有間皇子が藤白坂で絞首刑に処せられたことが記される。藤白坂は、都と護送先の紀の湯の間にある。紀の湯でもなく、自宅のある都でもなく、道中の藤白坂での処刑というのは、いかにも中途半端である。なぜそのような所で刑が執行される必要性があったのだろうか。その報を受けた人々が、そのような疑問を持つても不思議ではない。

そもそも何故わざわざ行幸先まで謀反人を連行しなければならなかったのだろうか。同じく謀反の罪に問われた大津皇子と長屋王は、逮捕以降はおそらく一步も自邸から出ないまま、自邸で最期を遂げている。大津皇子は、逮捕された翌日に詔語田で死を賜ったとする『日本書紀』の記述に拠れば、その間、自邸にいたと考えるのが自然だろう。長屋王も、密告があった二月十一日の夜には自邸を包囲され、翌十二日に自邸で窮問を受け、十三日には自刃したという『続日本紀』の記述に拠れば、その間は自邸で監禁状態にあったと推測される。発覚から最期まで自邸に留め置かれた二人の事例に照らし合わせると、天皇の旅先までわざわざ連行され、その道中で刑が執行された有間皇子の処遇は、異様に感じられる。もちろん、斉明天皇が行幸中であつたことに拠る異例の対応だったという説明は可能ではある。しかしそれで

も、謀反人を行幸先まで呼びつける不自然さはぬぐえない。途中で逃亡でもされたらどうするのか。謀反は権力の篡奪を狙う国家の危機である。皇太子の中大兄皇子だけでも都に戻るとか、予定を変更して天皇が帰京するなどの緊急対応がなされる方が自然ではないだろうか。その上、斉明天皇は年が明けるまで紀の湯に留まり続けたという。『日本書紀』が記す斉明天皇の謀反への対応を読んでいると、その危機管理能力に対して不信感が抱かれる。

どうにも『日本書紀』の記述は、斉明天皇の能力に対して批判的であるように思われる。『日本書紀』の編者は、斉明天皇に統治者としての資質があれば、有間皇子が陽狂する必要はなかったし、蘇我赤兄に批判の材料を与えることも、有間皇子が赤兄に同調することもなかったはずだと考えているのではないだろうか。そして、斉明天皇が悠長に温泉に浸かっている間に、有間皇子はその温泉まで連行された挙句の果てに道中で処刑されるという衝撃的な最期を遂げた。書紀編者は、統治者としての資質に欠けた斉明天皇が統治者であるという時代のせい、計略に嵌められて謀議を図り、尋問先に連行されたまま帰って来なかった有間皇子という謀反人が生み出されたのだと考えているのではないかと推察される。

斉明紀は、奇怪な現象や童謡の記述が多い。元年五月一日条には、唐人に似た者が空中を竜に乗って飛んだり、葛城山から生駒山、住吉の岡の方へと青い油笠を着た者が走ったりする怪異が記される。百済への援軍派遣にあたっては敗北の前兆として蠅の異様な大群が発生し、童謡が歌われたとされる。挙句のはてには出征の道中に斉明天皇自身

が崩御する。それだけでもこの上もなく不吉だが、その喪儀を朝倉山の上から大笠をかぶった鬼が見ていたという不気味な怪奇現象まで記される。また斉明二年条には斉明天皇に対する直接的な批判も記される。土木工事を盛んに行う斉明天皇に対して、時人が「狂心の渠。損費すこと、功夫三万余。費損すこと、造垣功夫七万余。宮材爛れたり。山椒埋れたり」、「石の山丘を作り、作る随に自づからに破れなむ」と批判したという。立場上、あからさまに天皇を批判することが難しかったであろう『日本書紀』の編者は、怪異や時人の声を記すことを通して、斉明に対する批判的評価を示そうとしたのではないだろうか⁴。

有間皇子の謀反について『日本書紀』は正文の他に、二種類の「或本」を併記している。その一つ、「有間皇子と蘇我臣赤兄・塩屋連小戈・守君大石・坂合部連葉と、短籍を取りて謀反けむ事を卜ふ」は、謀議に加わった人数が正文よりも多く、神意を得るために卜占を行ったとする。正文に採用された、蘇我赤兄と二人きりで、卜占も行われない謀議の場面よりも、計画性の高さを感じさせるものとなっている。或本のもう一つは、「有間皇子の曰く、『先づ宮室を燔き、五百人を以ちて、一日両夜牟婁の津を邀り、疾く船師を以ちて淡路国を断ち、牟圀の如くならしめば、其の事成し易けむ』と。或人諫めて曰く、『可未だ成人に及らず。成人に至りて其の徳を得べし』と。他日に、有間皇子と二判事と謀反る時に、皇子の案机の脚、故無くして自づから断れぬ。其の謨は止まずして、遂に誅戮されぬ』である。こちらの或本の有間皇子は、皇居を焼いて、さらに天皇の脱出ルートを塞いでしま

おうと言っているのであるから、知謀にたけ、かつなかなか凶暴である。「或人」の諫言は、もう少し大人になって徳を身につけなければ、たとえ謀反が成功しても誰もついてこないから結局は失敗するという意味であろう。有間皇子は、そのような諫言を受けたにも拘らず謀議を進め、結局は誅殺されることになったという。この二つ目の或本の有間皇子は、人徳が十分に備わっていないのに無理な謀反を企て、周囲の諫言にも耳を貸さずに皇位の篡奪を目論んだ皇子として造形されている。

この二つの或本に描かれた有間皇子は、正文の有間皇子よりも明らかに計画性があり、凶暴でかつ野心に満ちた策略家である。もし『日本書紀』の編者に、有間皇子を野心に駆られて皇位篡奪を狙った極悪非道の謀反人として断罪する意図があったなら、この二つの或本を正文に採用したのではないだろうか。この或本を採用しなかったところに『日本書紀』編者の編述意図が窺われる。書紀編者は、赤兄の斉明批判を真に受けて、赤兄を操る権力に嵌められた有間皇子像を造形した。そして、有間皇子謀反事件は、ただ有間皇子の性格のみにその原因を帰するべきものではなく、王としての資質に欠けた斉明天皇の時代ゆえに起きてしまった事件として意味づけることを意図したのではないだろうか。

謀反人は、権力者がどれほど無能であつても、その権力者に生殺与奪を握られた被支配者の立場にある。『日本書紀』の編者もまた、その抑圧された謀反人と同質の立場にある。斉明天皇に対する批判的な『日本書紀』の編述は、編者が自分たちの立場に自覚的であることを

窺わせる。その一方で、あえて或本を併記して、自分たちの認識とは異なる有間皇子像を伝える資料があることを示しているのは、編者自身が自分たちの有間皇子謀反事件に対する認識が絶対的なものではないことも自覚しているからであろう。

四、旅から帰ってこなかった皇子

『万葉集』は挽歌部の冒頭に、有間皇子謀反事件に関連する歌六首を配列する。

I 有間皇子自ら傷みて松枝を結ぶ歌二首

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む (②一四一)
家があれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る (一四二)

II 長忌寸意吉麻呂結び松を見て哀咽する歌二首

磐代の崖の松が枝結びけむ人は反りて復た見けむかも (一四三)
磐代の野中に立てる結び松情も解けず古念ほゆ (一四四)

III 山上臣憶良追和する歌一首

鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ (一四五)

右の件の歌どもは、柩を挽く時に作る所にあらずと雖も、歌意を准擬す。故に挽歌の類に載せたり

IV 大宝元年辛丑紀伊国に幸ましし時、結び松を見る歌一首 柿本朝

人麻呂歌集中に出づ

後見むと君が結べる磐代の子松がうれをまた見けむかも (一四六)

Iは、謀反当時、処刑される前に有間皇子本人が残した辞世の歌として配列されている。IVの柿本人麻呂歌集の創作時期は、題詞に拠って大宝元年紀伊行幸時であることが知られる。IIの長忌寸意吉麻呂歌とIIIの山上憶良歌の創作時期については、どちらも持統四年の紀伊行幸時とする説⁵⁾、意吉麻呂歌を大宝元年紀伊行幸時とし、憶良歌を唐から帰国した七〇四年以降だとする説⁶⁾、或いは憶良歌を天平年間まで引き下げる説⁷⁾など、様々な考えが出されており、統一した見解が示されているとは言えない。

IIIの憶良歌は、「結び松を人は帰ってきてもう一度見たのだから」と問いかけるII意吉麻呂歌(一四三)に対して、「今も鳥になつて見ているだろう」と答える形で「追和」したものとなっている。憶良が同行していたのであれば、わざわざ後から「追和」をする必要はないはずであるから、IIの意吉麻呂歌が創作されたのは、意吉麻呂が同行して憶良が同行しなかった紀伊行幸だと考えるのが自然だろう。候補となるのは、有間皇子謀反事件後、最初に行われた持統四年(六九〇)の紀伊行幸と、次に行われた大宝元年(七〇一)の紀伊行幸であるが、このうち意吉麻呂が同行した可能性が考えられて、かつ憶良が同行しなかったのは大宝元年の紀伊行幸である。『万葉集』巻九には大宝元年紀伊行幸時に創作された歌がまとまって収録されており、そのうちの一首、「風早の浜の白浪徒にここによせ来る見る人なしに」(二六七三)は、左注に「山上臣憶良『類聚歌林』に曰く、長忌寸意吉麻呂、詔に应じて此の歌を作る」とされる。『類聚歌林』にそうあるというだけであるから、確言はできないが、長忌寸意吉麻呂が

大宝元年の紀伊行幸に同行して一六七三番歌を創作したという推定は可能であり、大宝二年の三河行幸に同行して歌（①五七）を詠んでいることから考えても、その蓋然性は高いと言える。Ⅳの人麻呂歌集が、「君」すなわち有間皇子が磐代の結び松を再び見たかどうかを問うており、発想に意吉麻呂歌との共通性が見出される。この人麻呂歌集が題詞に大宝元年紀伊行幸時の作だとされることから、意吉麻呂歌もまた大宝元年行幸時のものではないかと類推される。一方、憶良は持統四年紀伊行幸における川島皇子歌（①三四）の作者である可能性が注記されることから、持統四年の紀伊行幸には同行した可能性がある。しかし、大宝元年正月に遣唐使少録に任命され、大使に節刀が授与された五月以降まもなく難波を出航し、筑紫に留まっていたため、大宝元年九月の紀伊行幸には参加できない。したがって、Ⅱ意吉麻呂歌は大宝元年紀伊行幸時に創作され、その行幸に同行できなかった憶良が後から追和したのがⅢではないかと考えられる。

このⅡ～Ⅳの興味関心は、「磐代の結び松」を見られたか否かに集まっている。Ⅱで長忌寸意吉麻呂は「磐代の崖の松枝結びけむ人」が帰ってきてその松枝をまた見ただろうかと問う。この「人」はもちろん有間皇子であり、幸運にも戻って来られたら結んだ磐代の浜松の枝をもう一度見ようと言ったⅠの有間皇子の一四一番歌を受けた問いかけである。それに応えるのがⅢの憶良の追和歌である。一句目「鳥翔成」は訓読が定まらない。が、「鳥」「翔」「成」字それぞれの『万葉集』における用いられ方を検討し、「鳥」は「トリ」、「成」は「ナリ」、その二字をつなぐ「翔（トブ）」を略訓の形で「ト」と訓んで、「トリ

トナリ」と訓読し、ヤマトタケルと二重写しにする憶良の意図を読み取る大久保廣行氏の論に説得力を感じる。憶良は、意吉麻呂歌の問いかけに対して、旅の途中で命を落とし、故郷である都に還ってこなかったヤマトタケルと有間皇子とを重ね合わせ、ヤマトタケルが「白（智）鳥」となって飛翔したように、有間皇子も鳥となって結び松を見に飛んできていると追和したのである。

Ⅰの一四一番歌で有間皇子が松を結んだという磐代は、『日本書紀』が処刑の地だとする藤白坂よりも、紀の湯に近い。都を起点にすると、藤白坂を通り、磐代を通り、紀の湯に到着する。「真幸くあらばまた還り見む」は、「幸運だったら再び還って見よう」という意であり、復路における再見への希望であるから、磐代を最初に通過した時の言葉だとするのが自然である。その後、有間皇子が処刑されたという結末だけを知り、処刑地が藤白坂だとされることや地理的關係を知らないで、この一四一番歌を読むと、「真幸くあらば」の仮定形は切実に響く。この仮定は実現しなかったのだろうと想像してしまうからである。しかし、『日本書紀』の記述を知り、磐代と藤白坂の位置関係を把握していれば、そのような想像は働きにくい。藤白坂は磐代よりも都寄りに位置するため、有間皇子は紀の湯で尋問を受けた後、藤白坂で処刑される前に、磐代をもう一度通り、希望通り結び松を見られたと考えることになるからである。「有間皇子がもう一度結び松が見られたかどうか」という問いや、見られなかったのではないかとこの同情は、詳細を知らない者の想像力によって生み出される。

大宝元年紀伊行幸時は、『日本書紀』が完成する約二十年前である

から、意吉麻呂たちが『日本書紀』の記述を知らなくてもおかしくはない。が、それだけでなく、有間皇子謀反事件は、既に約四十年が経った大宝元年という「現代」においては、生々しくリアルな現実としてではなく、「歴史」の一場面として位置づけられ、セピア色に変化した「過去の記憶」として共有されていたのだろう。追憶の対象となっていた有間皇子は、紀伊国へと連行された道中の磐代で松を結び、無事の帰還を願うも、その松を見ることもなく、そのまま還らぬ人となった皇子だと記憶され、「旅から帰ってこなかった皇子」として形象化されていたのではないかと推察される。

そのように形象化された要因の一つは、行幸先へと連行され、その道中で処刑されたことに対する衝撃の強さにあったのではないかと想像される。『古事記』の軽太子の如く流刑地で死んだ例はある。しかし、行幸先へと連行されて、そのまま処刑されるというのは異例であり、強い衝撃とともに受け止められたのではないだろうか。

そもそも一つの要因は、有間皇子自身の歌だとして残るⅠの二首が、どちらも旅の道中の歌であったことにあるだろう。この二首については、実作説⁽⁹⁾、仮託説⁽¹⁰⁾、斉明三年自作転用説⁽¹¹⁾などが出され、定説を見ていない。が、福沢健氏⁽¹²⁾が論じる通り、二首とも旅の安全を祈る類型的な表現をとっている。処刑を前にした本人の実作とするにはいささか切迫感に欠ける。第三者の仮託にしては、この事件の固有性が全く見られず不自然である。死を覚悟した有間皇子に仮託するならば、もつと事件に沿った内容と表現が採られてもよいだろう。一四一番歌の「ま幸くあらば」という仮定形が、流刑地へ赴く穂積老歌⁽³⁾二八

八)に用いられていることを重視する考えもある。しかし、流罪は遠地への追放ではあるが、死が決定されているわけではない。穂積老歌の「ま幸くあらば」は、遠い異郷に旅することへの不安の表出である。一四一番歌は、謀反事件に限定された固有の歌としてよりも、安全を祈る羈旅歌の一般として解する方が、合理的ではないかと思われる。

一四二番歌は「家」と「旅」を対比的に配置する羈旅歌の類型的な構造をとる。「磐代」は「日高・牟婁の堺で、異郷視せられて居た熊野の入口に当る場処⁽¹³⁾」だとされ、「古代の岩石信仰に発して『磐代』の名にも特異な畏敬を覚えて、道の神に対して草結びや松が枝を結ぶ習俗もとくに意味深く行はれ⁽¹⁴⁾」た場所だとされる。それは斉明五年の紀伊行幸に同行した中皇命の「君が代も我が代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな」⁽¹⁾一〇)にも表れている。一四一番も一四二番も磐代という境界において、松の枝を結び、神饌を供え、旅の安全を祈る歌として受け取られる。このような二首が有間皇子の歌として残されたことよって、有間皇子は「旅の皇子」として後世の人に強く印象づけられることになったのではないかと推察される。

Ⅱ意吉麻呂もⅢ憶良もⅣ人麻呂も、有間皇子が結び松を見られなかったと想像している。だから、「見られたのか」と問い、「今ごろは鳥になって見ているだろう」と言う。磐代で結んだ松の枝を「ま幸あらばまた還り見む」と祈るⅠ有間皇子歌が起点となり、旅の途中で命を落とし、二度と還って来なかった皇子として有間は形象化されていったのではないかと考えられる。

五、さすらう有間皇子

『俊頼髓脳』には、『日本書紀』とは異なる有間皇子の話が記される。⁽¹⁵⁾

孝徳天皇と申しけるみかど、位をさり給はむとしける時、有馬の皇子に位をゆづり給ふべきを、えたもつまじきけしきを御覽じて譲り給はざりければ、怨み申して山野にゆきまどひ給ひて、岩代といへる所にいたりて松のえだを結びてよみ給へる歌なり。

孝徳天皇は、本来なら皇位を有間皇子に譲るべきなのだが、有間皇子は天皇にふさわしくないと思つて譲らなかつた。有間皇子はそのことを怨み、山野を放浪してたどり着いた岩代で松の枝を結んでこの歌を詠んだのだと俊頼は言う。その後の紀伊行幸で岩代の結び松や浜松枝のたむけ草が詠まれたことについても、有間皇子が「まどひありき給ふやうを聞きて世の人あはれがり申しけり」と言う。この『俊頼髓脳』の見解は『和歌童蒙抄』にもほぼそのまま掲載される。また『綺語抄』では、「或人云ふ、岡本天皇の王子のものにくるひてありき給けるが、伊勢国のいはしろといふ所の松を、いまあるきめぐりてえだ見むとてむすびおき給へりける…」とかなり異なる情報に改変されているが、放浪する有間皇子の姿は引き継がれている。『奥義抄』では「有間の皇子世をうらみて山野に迷ひありき給ひしとき結びたまへる松なり」とやや大雑把なものとなって『和歌色葉』にはそのまま引

き継がれる。『袖中抄』では、『俊頼髓脳』『綺語抄』の記載を列挙し、「今云ふ、此事皆以て証拠無き事等なり。斉明天皇四年戊午十月紀伊国温泉に幸し、有間皇子謀反して磐代の結松墓に誅せらる義か」と述べ、『日本書紀』『万葉集』に基づく考証を試みている。父親に疎まれて放浪した皇子だとする『俊頼髓脳』、狂つて放浪した皇子だとする『綺語抄』、世をうらんで放浪した皇子だとする『奥義抄』『和歌色葉』というように、少しずつ理由がずれてはいるが、「放浪する」という点は共通している。顕昭は先行する歌学書の発言を証拠がないとして否定し、『日本書紀』などによって「謀反で誅殺された皇子」と結論している。が、そのこともまた、「放浪する有間皇子」像が平安後期には確かに出来上がっていたということを窺わせる。

『俊頼髓脳』の「父親に認められないことに対する怨みから放浪する有間皇子像」からは、『古事記』のヤマトタケルが連想される。有間皇子とヤマトタケルが混同されているのではないだろうか。『日本書紀』のヤマトタケルは父である景行天皇にとって理想の息子として造形されるが、『古事記』では景行天皇に疎まれ、西へ東へと征討の旅に出ることになる。東征に際しては、父親の真意に気付き、失意のうちに出発する。それを引きずったのであろうか、東征では、自らの知略によって奔放にかつ力強く勝利を収めた西征とはうって変わり、草薙の太刀や弟橘姫などの力を借りての辛勝を繰り返す。そしてその最果てに、伊吹山の神との戦いで失敗して、都まであと一步の所まで戻ってきたながら、帰還を果たさずに命を落とす。有間皇子とヤマトタケルは、旅に出た理由も死んだ理由も異なるが、道中で命を落とし、

都に戻ってこなかったという点は共通している。それともう一点、有間皇子もヤマトタケルも天皇の皇子という尊貴な身分であるということが共通している。本当なら、二人とも放浪する身分でも、旅先で死ぬ身分でもないのである。そんな尊い身分であるのに、放浪の末に道中で死ぬという、この落差が衝撃となる。この衝撃によって有間皇子は時にヤマトタケルとの混同も生じながら、典型的な貴種流離の皇子として形象化されることになったのだと考えられる。

六、大津皇子と山辺皇女

『日本書紀』は大津皇子の謀反について、天武朱鳥元年九月二十四日条に、殯宮において「大津皇子、皇太子に謀反す」との一文を記した後、持統天皇称制前紀に入って次のように記す。

F 皇子大津の謀反、発覚す。皇子大津を逮捕し、并せて皇子大津が為に誣誤せらる、直広肆八口朝臣音檀・小山下壹伎連博徳と、大舍人中臣朝臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心と帳内礪杵道作ら、三十余人を捕む。(十月二日)

G 皇子大津に詔語田の舎にて死を賜ふ。時に年二十四。妃皇女山辺、被髮徒跣にして、奔り赴きて殉ず。見る者皆歔歔く。皇子大津は、天淳中原瀛真人天皇の第三子なり。容止墻岸、音辞俊朗にして、天命開別天皇の為に愛せらる。長ずるに及びて弁く才学有り、尤も文筆を愛す。詩賦の興り、大津より生まれり。(十月三日)

H 詔して曰く、「皇子大津謀反す。誣誤されたる吏民・帳内は已むこと得ず。今、皇子大津は已に滅びぬ。従者の皇子大津に坐す者は、皆赦すべし。但し、礪杵道作は伊豆に流せ」と。又詔して曰く、「新羅沙門行心、皇子大津の謀反に与せれども、朕、加法するに忍びず。飛驒国の伽藍に徙せ」と。(十月二十九日)

有間皇子謀反事件については、謀議の様子、発覚に至る経緯、尋問の受け答えなどが細かに記され、記述に具体性があるのに対して、大津皇子謀反事件については謀反、発覚、賜死といった「出来事」は記されるが、具体的な内容は記されない。

その一方で『日本書紀』は、**F**で連座者の人数については「三十余人」とやや具体的に述べると同時に、壹岐博徳や巨勢多益須といった錚々たるエリート官僚を含む主要メンバーの名前を具体的に記す。さらには、大津皇子がそれらの加担者を「誣誤」したという認識を示す。これは、**H**の持統天皇詔の「誣誤されたる吏民・帳内」とも共通する認識である。さらに**G**では、大津皇子が聡明で知性あふれた知識人であったとする伝を付している。したがって、『日本書紀』では、知識人である大津皇子が、自らをとりまく多くの知識人を誣誤して加担させ、徒党を組んで国家転覆を謀った事件だという理解が示されている¹⁶と言える。

Gの「妃皇女山辺、被髮徒跣」については、『後漢書』伏皇后紀の「妃被髮徒跣」が、河村秀根『書紀集解』によって典拠として指摘されている。「妃被髮徒跣」は、伏皇后が曹操暗殺計画に関与していた

ことが露見して捕えられ、連行されて夫の献帝の前を通り過ぎる時の姿を描写したものである。伏皇后は、「被髮徒跣」して「復た相ひ活かすこと能はざるや」と献帝に最後の言葉をかける。それに対して、献帝は「我も亦た命の何時に在るかを知らず」と答える。伏皇后はそのまま幽閉されて崩御する。実質的権力を曹操に握られて、後漢末期の政治的混乱に巻き込まれた献帝と伏皇后の最期の場面である。「妃被髮徒跣」は、本当なら皇后として君臨しているはずだったのに、囚われの身となった皇后の哀れで悲しい姿を表す。それと同時に、死の間際まで夫とともにあることを望み、夫にその気持ちを投げかけた妻のなりふり構わぬ姿として強く印象づけられる。

謀反人の妃と、曹操に権力を掌握された皇帝の後とは、現実的には立場が全く異なる。また、「被髮」も「徒跣」も漢籍に用例は多く、特殊な語とは言えない。しかし、「被髮徒跣」が、献帝・伏皇后と、大津皇子・山辺皇女という、時の権力によって滅亡に追い込まれる王族だという点に類似性を見出すことができる夫婦の最期に共通して用いられるところは注目される。『日本書紀』の編者は、伏皇后紀の「妃被髮徒跣」を用いることにより、山辺皇女に伏皇后を重ね合わせ、政治的闘争に巻き込まれ、夫に殉じた皇后候補者として山辺皇女を造形しようとしているのではないだろうか。

Gは、その山辺皇女の殉死を記すにあたって、「見る者皆歎く」と述べる。この「見者皆歎」についても、『岩波大系』『新編全集』の頭注などにおいて、同じく『後漢書』から何皇后紀の「坐者皆歎」が典拠として指摘されている。董卓によって廃されて弘農王とさ

れた少帝は、母、何皇太后の崩御後、董卓の乱の際に毒殺される。飲んだら死ぬと分かっているが、董卓の強要を避けられないと悟った弘農王は、妻である唐姬や臣下と別れの宴を開き、唐姬に惜別の歌を贈る。唐姬もまた舞いながら弘農王に別れの歌を歌い、涙を流し嗚咽する。その二人の様子を見ていた人々の様子を表すのが、「坐者皆歎」である。

中西進氏¹⁷は、この何皇后紀の「坐者皆歎」よりも、『後漢書』の董祀妻伝に掲載される「悲憤詩」中の句「観者皆歎」の方が典拠としてふさわしいとする。董祀妻は蔡邕の娘である蔡琰（文姬）のことである。蔡琰は匈奴に嫁したが、曹操の取り計らいで取り戻されて董祀に嫁ぐことになった。「悲憤詩」にはその生涯が描かれ、「観者皆歎」は匈奴を離れる際に匈奴でなした子供や親しくした人と別れを惜しむ場面で用いられる表現である。董祀に嫁した蔡琰は、罪を犯した夫董祀のために曹操のもとに出かけ、「蓬首」で「徒行叩頭」して許しを請う。曹操はその罪を許し、寒いだろうからと頭巾、履、襪を与えたという。中西氏は、蔡琰の「蓬首」は山辺皇女の「被髮」と重なり合い、「徒行叩頭」して夫の命乞いに来て「履」が与えられたという蔡琰の姿は、山辺皇女の「徒跣」と重なり合うとし、「書紀執筆者の意図は、董祀同様、大津の罪も許されるべきであったという主張するところにあつた」と論じている。

中西氏の論はとても面白い。「観者皆歎」は確かに「坐者皆歎」よりも「見者皆歎」に更に似ている。しかし、中西氏がもう一つの論拠とする「徒行叩頭」「蓬首」して夫の命乞いをする蔡琰の姿

は、「観者皆歎歎」が用いられる場面とは別の場面で描かれており、直接的にはつながらない。また、董祀と皇族である大津皇子とでは立場が違いすぎることも考え併せると、「観者皆歎歎」を直接の典拠とすることは躊躇される。『陳書』呉明徹伝にも、「見る者皆歎歎く、仰ぎ視ること能はず」という『日本書紀』と完全に一致する例はあるが、王琳という軍人が捕えられた時の部下の様子を描いたものである。「歎歎」は漢籍で様々な文脈に多用される一般的な用語であり、何か一つを典拠として特定すること自体が困難であるようにも思われる。

ただ、『後漢書』において何皇后紀と伏皇后紀は前後で連続して置かれており、かつ「妃山辺皇女、被髮徒跣」が『後漢書』伏皇后紀の「妃被髮徒跣」を踏まえている可能性が高いと考えられることから言えば、「見者皆歎歎」についても、伏皇后紀に連続する何皇后紀の「坐者皆歎歎」の「歎歎」に触発されて用いた可能性は否定できないだろう。『日本書紀』の編者は、伏皇后紀の「妃被髮徒跣」を典拠とすることで、自らも天皇になってもおかしくはないが、時の権力者によって排除された皇族大津皇子の妻として山辺皇女を造形した。そして、何皇后紀における唐姫と弘農王の最期の悲しさを演出する「坐者皆歎歎」に学び、山辺皇女の死を同情的に描き出したのではないかと推察される。

Gの大津皇子小伝¹⁸は『日本書紀』では唯一となる異例の皇子伝である上に、謀反人の大津皇子を高い才能の持つ主として讚美するという、国家の歴史書としてはいささか非常識な内容となっている。謀反人として大津皇子を記述する場面において、そのような異例で非常識とも

言える伝をあえて書き記したところに、大津皇子を知識人として称揚しようとする編者の意識が窺われる。自身もまた知識人である『日本書紀』の編者は、大津皇子謀反事件を、自分たちと同じ知識人が起こし、権力によって滅ぼされた事件として認識し、大津皇子の死を自分たちと同類である知識人の死として受け止めているのだろう。常に国家権力と対峙せねばならない立場にあるのが知識人である。大津皇子謀反事件は、『日本書紀』の編者にとって他人ごとではなかったのである。

七、理想の持統天皇

Hの持統天皇の詔は、大津皇子のみを首謀者として断罪し、ほぼ全ての加担者を赦免するというものである。そのため、大津皇子謀反事件は持統天皇の謀略だったとする見解は今もなお根強い。しかし、たとえ現実がそうであったとしても、『日本書紀』の編述は持統天皇を謀略者として造形するものにはなっていない。

持統の詔は河村秀根『書紀集解』が指摘する『漢書』景帝紀の詔に酷似する¹⁹。試みに原文で並べてみよう。

持統詔「皇子大津謀反。①誅誤吏民、帳内不得已。②今皇子大津已滅。③従者当坐皇子大津者、皆赦之。但、礪杵道作流伊豆。」
「新羅沙門行心、④与皇子大津謀反、朕不忍加法。徒飛驒国伽藍。」

景帝詔「吳王濞等為逆、起兵相脅、①誅誤吏民、吏民不得已。②今濞等已滅。③吏民当坐濞等及逋逃軍者、皆赦之。楚元王子蘇等、④与濞等為逆、朕不忍加法、除其籍、母令汗宗室。」

景帝の詔は、呉楚七国の乱を平定した後、加担者たちの処遇を傳達するものである。傍線部は、①加担者は首謀者に「誅誤」された、加担者がおり、それらについては別途処断する、という内容である。②首謀者は滅んだ、③加担者は皆赦す、④一部、処罰するに忍びない要するに、加担者を首謀者にだまされた者と見なし、皆赦そうということである。加担者に甘すぎるとは思いたくなる詔であるが、漢籍ではこのような詔は特殊なものではない。「其の吏、桀等の誅誤する所と為る。未だ発覚せずして在る吏は、其の罪を除け」（『漢書』昭帝紀）、「諸、霍氏の誅誤する所と為る。未だ発覚せずして在る吏は、皆、之を赦除せよ」（『漢書』宣帝紀）など、加担者を首謀者に「誅誤」された立場と見なして赦免するというのは、反乱平定後に出される詔の定型になっている。これによって、配下にある人間の生殺与奪を握る権力と、大きな徳とを合わせた理想の皇帝像が創られる。

持統の詔は、景帝の詔と傍線部がほぼ完全に一致している。『日本書紀』編者が持統詔を記すにあたって景帝の詔を下敷きにしたと考えるのが自然であろう。持統の詔は、漢籍における反乱平定後の皇帝の詔の定型に沿って置かれたものと推察される。従って、『日本書紀』の編者の意図は、持統天皇を中国の皇帝になぞらえて、理想の天皇と

して描き出そうとするところにあつたと考えるのが妥当であろう。さらに、呉楚七国の乱が、漢の宗室である劉氏の内乱であつたことを考え合わせれば、大津皇子謀反事件を皇室の内乱として位置づけ、それを平定し、より強固な権力を掌握して国家統治に望む、強くて慈悲深い理想の天皇として持統を描き出そうとする意図が編者にはあつたのではないかと思量される。²⁰

『日本書紀』は、謀反を起こした大津皇子を才能あふれる知識人であり、その才能からすれば十分に統治者になれる皇子だったと評価している。『日本書紀』の編者は、大津皇子謀反事件を、自分たちと同じ知識人が起こして滅んだ事件として認識し、才能あふれる知識人の滅亡を悼んでいるのである。それと同時に、持統天皇に対しては、知識人が起こした内乱を見事に平定した理想の天皇だと評価している。これをもって、より一層強固な権力を握った持統天皇の御代が始まる、そのような歴史観を示しているのだろう。

八、『万葉集』の大津皇子——女性に愛される皇子——

『万葉集』が描く大津皇子謀反事件には、有間皇子謀反事件には登場しなかつた姉や恋人といった女性陣が登場する。

V 大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の御作りになる歌二首

吾が背子を倭へ遣るとき夜更けて鶏鳴露に吾が立ち濡れし

(②一〇五)

二人行けど去き過ぎ難き秋山を如何にか君が独り越ゆらむ

(一〇六)

VI 大津皇子、石川女郎に贈る御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つと吾立ち濡れぬ山のしづくに

(一〇七)

石川女郎、和し奉る歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを

(一〇八)

VII 大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時、津守連通其の事を占へ露

して、皇子の御作りになる歌一首 未詳

大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人宿し

(一〇九)

日並皇子尊、石川女郎に贈る御歌一首 女郎、字を大名児と曰ふ

大名児を彼方野辺に苅る草の束の間も吾忘れめや (一一〇)

VIII 大津皇子死を被りし時、磐余池の陂にして涕を流して御作りに

なる歌一首

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(三四一六)

IX 大津皇子薨りましし後、大来皇女伊勢斎宮より京に上り来し時

に御作りになる歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに

(一一一)

見まく欲り吾がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに

(一一二)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬りし時、大来皇女哀傷して御作りになる歌二首

うつそみの人なる吾や明日よりは二上山をいろせと吾が見む

(一一三)

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど視すべき君がありと言はなく
に (一一四)

VとIXには姉大伯皇女が登場する。Vでは、人目を避けて斎宮まで会いに来た弟を倭へ送り返す際に、道中を心配して夜半から暁まで立ち尽くしていた姉の様子が描かれる。IXでは、大津皇子が死んだ後の大伯皇女が描かれる。斎宮を解任されて上京し、弟の不在に対する悲しみと徒労感とを吐露し、弟が移葬された二上山を弟だと思つて見る意志を詠出する。大津皇子からの歌がないため、大伯皇女が一方的に弟を思う世界が繰り広げられることになる。弟の行く末を見通しながら、なす術もなく、都に戻ってきた時には全てが終り、死んだ弟の不在を嘆くしかない。移葬された二上山を弟だと思つて見ようと思うが、いくら二上山を見たつて、二上山は弟ではない。弟の不在を再確認させられるばかりだという姉の姿が、姉の独白によつて描かれる。⁽²¹⁾

VIとVIIでは、「石川女郎(女郎)」をめぐる草壁皇子との対立が描かれる。Vからの連続性を考えると、姉の心配をよそに、皇太子が思いを寄せる女性と秘かに恋愛する奔放な大津皇子像が描かれる。

「山のしづく」をキーワードとして交わされるVIの一〇七番歌と一〇八番歌では、人目を避けて山で逢い引きしようとするも、石川女郎

が現われず、大津皇子が待ちぼうけを食わされたという状況が描かれる。三十一文字という限られた字数の中で、大津皇子歌（一〇七）は「山のしづく」を二回も用いて「君を待つて濡れたんだ」と必死で訴える。石川郎女歌（一〇八）は、その「山のしづく」を受け取って、「そのあなたが濡れたって山のしづくになりたかつたんだけど、なれなくて残念だったわ」と返す。大津皇子の体にくつついたという「山のしづく」になりたいという所に媚態を漂わせながらも、「山のしづくに濡れた、濡れた」と訴える大津皇子に対して、「はいはい、分かったわよ」と軽くあしらうような響きも持ち合わせる歌である。山での逢い引きという状況に事態の異常さを見るむきもある。²²しかし、この二首の表現は、贈歌の仕掛け（この場合「山のしづく」）に当意即妙に反応して、機知に富んだ歌で答えるという、宴席における贈答歌の典型的表現である。謀反を前にした緊迫感や深刻さを表す要素は見当らない。むしろ宴席において「山のしづく」をキーワードとして「人目を忍ぶ恋」をテーマとして披露された贈答歌であろう。つまり、大津皇子と石川郎女の恋愛関係も、「山での逢い引き」という状況も、テーマにあわせて仮構されたものだと考えられる。

しかし、そのようなⅥの一〇七・一〇八の贈答歌も、続くⅦの一〇九番歌と一一〇番歌と読み合わせることによって、謀反に関連した深刻な三角関係を物語る歌に変貌する。²³一〇九番歌では、津守通という陰陽師によって石川女郎と大津皇子の密通が暴露され、一一〇番歌では石川女郎は草壁皇子が思いを寄せる女性であったことが明かされる。ここに至って初めて、皇位継承上のライバル関係にある草壁皇子と大

津皇子が、石川郎女（女郎）をめぐる敵同士だったことが物語られることになる。その上、石川郎女（女郎）に選ばれたのは草壁皇子ではなく、大津皇子であった。皇太子から女性を奪う大津皇子像が描かれる。

Ⅵの一〇七・一〇八番歌で大津皇子と贈答歌を交わした「石川郎女」が、Ⅶの一〇九・一一〇番では「石川女郎」となっている。「石川郎女」と「石川女郎」は同一人物だと考えないと文脈が成り立たない。『万葉集』の編者は、そのつもりでⅥとⅦを配列したはずである。『万葉集』中に登場する「郎女」と「女郎」のつく女性が、混同されずに書き分けられていることを考えると、『万葉集』編者の誤記である可能性は極めて低い。むしろ『万葉集』の編者が原資料に忠実に表記した結果生じた相違だと考えるべきであろう。つまり、ⅥとⅦは、別々の資料から抜き出されて、『万葉集』上で初めて連結されたということである。Ⅵは大津皇子と「石川郎女」の贈答歌を掲載する資料から、Ⅶは「石川女郎」をめぐる二皇子の歌を掲載する資料から、それぞれ抜き出されて『万葉集』に配列されたものと推察される。

Ⅶの「石川女郎」は、卷二相聞部の一二六〜一二九番歌において、大伴田主と大伴宿奈麻呂という兄弟の両方に言い寄った老女として登場し、一二九番歌の題詞において「大津皇子宮侍石川女郎」と記されている。これによって、大伴氏の二人の兄弟両方に恋慕した老女「石川女郎」と、皇位を争った二人の皇子と三角関係にあった「石川女郎」とが結びつけられる。「石川女郎」は、若かりし頃に大津皇子と草壁皇子の両方に愛され、老いては大伴田主と大伴宿奈麻呂の両方に

言い寄った、派手な男性遍歴を持つ女性としてキャラクター化されていたのではないだろうか。⁽²⁵⁾ VIIが掲載された原資料は、「石川女郎」を主人公とした物語だったのではないかと思われる。『万葉集』の編者は、その「石川女郎」の物語の中の「石川女郎」をめぐる二皇子の歌（VII）を、宴席歌として残っていた「山のしづく」をめぐる大津皇子と石川郎女の贈答歌（VI）の後に配列し、謀反の裏にあった三角関係を物語る四首としたのではないかと推察される。

『万葉集』の大津皇子は、姉からの愛情を一身に受け、石川郎女（女郎）の心を草壁皇子から奪う。「女性に愛される男」として造形されている。『日本書紀』にあった山辺皇女の殉死も、『日本書紀』がそれを前面に押し出しているわけではないが、妃に思慕される大津皇子像と言える。そのように見ると、VIIIの死を前にして「磐余の池に鳴く鴨を見」る大津皇子にも、そのキャラクターをあてはめたくなる。

「鴨」は、「水鴨なす二人並び居」（③四六六・大伴家持）、「軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに」（③三九〇・紀皇女）、「鴨すらも妻とたぐひて」（⑤三六二五）のように、雌雄一対でいる習性から仲睦まじい男女の象徴として用いられる。動物の鳴き声は愛しい人を呼ぶ声に重ね合わせられるのが通例であるが、鴨の声も「沖辺には鴨妻喚びひ」（③二五七・鴨足人）というように妻を呼ぶ声として聞かれる。大津皇子歌の「磐余の池に鳴く鴨」も、鳴く鴨に恋人を呼ぶ姿が重ね合わされているのではないかと思われる。

有間皇子の場合は、その末期の目に映ったものは結び松だった。それに対して、大津皇子の場合は、その末期の目に映ったものは鳴く鴨

だった、そのような想像が後世の人々の間でなされたのではないかと推察される。⁽²⁶⁾ その想像を喚起したのは、姉大伯（来）皇女の歌や石川郎女（女郎）をめぐる歌から創り上げられた、女性に愛される大津皇子というイメージだったのではないだろうか。

『万葉集』の大津皇子は、ただでさえも皇位継承をめぐって対立している皇太子と、女性をめぐっても対立するという危険を冒す。そして、斎宮という立場にあり、俗世のしがらみを絶って神に仕えるべき姉を、俗世にひきずり戻すことになった。自由奔放、大胆不敵な性格で、社会の秩序よりも自らの欲望を優先させるこの大津皇子像には、『日本書紀』のような、知識人に囲まれ、礼儀を重んじる硬派なエリート皇族としての要素は見当らない。『万葉集』は、社会的規範や常識よりも自らの情を最優先させる性格で、それがもつて命を落とすことになるが、同時にその危うさが女性の心を捉える魅力ともなる、大津皇子のことをそのような皇子として造形しているのではないかと思われる。

[注]

(1) 『日本書紀』古訓に、「黠賊也」（神武天皇即位前紀戊午年十一月条）は「サトキアダナリ」、「性黠」（斉明天皇三年九月条）は「ヒトトナリサトリテ／サトシ」というように、「サトシ」とある。「サトシ」の訓は、例えば『私記（丙本）』に「天皇生而明達」（神武紀）の「明達」に「佐止師」とも見える。『時代別』の「さとし」の項目には、「物事に敏感で、理解や判断が早く、すぐれている。サカシに近い。：『黠賊』の訓によれば、わるがしこい、こざかしいの意もあったも

のか」とされている。因みに「さかし」の語義を『時代別』は「賢明である」と説明する。『岩波大系 日本書紀』には、「古訓にはワルガシコイ意は見当らない」と注されている。『新編全集』は神武紀の「黠賦也」については、「『新撰字鏡』に「黠、慧也。佐加志」とある」として、「黠しき賦なり」と訓む。「黠」の字義と、「サトシ」の古訓の間にはずれがあり、「黠」字に対する理解については改めて考える必要があると思われる。

(2) 「陽狂」については、矢嶋美都子『佯狂—古代中国人の処世術』（汲古選書、二〇一三年）、中西進『狂の精神史』（講談社文庫、一九八七年）など参照。

(3) 和田萃氏が「万葉挽歌の世界」（岸俊男他編『日本の古代 別巻 日本人とは何か』中公文庫、一九九七年）において、有間皇子は「斉明を『天』と表現することで、事件の真の策謀者」が「斉明天皇」であることを「指摘」していると論じている。但し、和田氏は、現実には有間皇子を陥れようと策謀したのが斉明天皇だと考えているのに対して、本稿は、『日本書紀』の編者がそのように推察する有間皇子像を造形していると考えているところが違っている。

(4) 皇極天皇元年十月条と同二年二月条に、季節に合わない政令を行って災いを起こしたとする、『礼記』月令に基づく異変記事がある。これも皇極天皇の能力の低さを指摘しているとも読め、『日本書紀』の編者が重祚した女帝に対して、一貫して批判的な評価をしていたことを窺わせる。

(5) 中西進「磐代にて」（『中西進 万葉論集 第八卷 山上憶良』講談社、一九九六年）など。

(6) 伊藤博『万葉集釈注』（集英社、一九九五年）など。

(7) 村瀬憲夫「岩代の追和歌」（『紀伊万葉の研究』和泉書院、一九九五年）。

(8) 大久保廣行「『鳥翔成』考」（『筑紫文学圏論 山上憶良』笠間叢書、一九九七年）。

(9) 阪下圭八「真幸くあらばまたかへり見む」（『初期万葉』平凡社、一九七八年）など。

(10) 山本健吉・池田弥三郎『万葉百歌』（中公新書、一九六三年）など。

(11) 露木悟義「有間皇子と磐代」（犬養孝『万葉の風土と歌人』雄山閣、一九九一年）など。

(12) 福沢健「有間皇子自傷歌の形成」（『上代文学』五十四号、一九八五年四月）。

(13) 折口信夫『万葉集短歌論講』（『折口信夫全集』二十九卷、中公文庫、一九七六年）。

(14) 犬養孝「紀の湯へ」（『万葉の風土続』塙書房、一九七二年）。

(15) 『俊頼髓腦』をはじめとした歌学に採り上げられた有間皇子については、Kornu N. Vilia『俊頼髓腦』における有間皇子の説話（岩代の結び松）（『京都大学 国文学論叢』二十五号、二〇一一年三月）に詳しい。

(16) 『日本書紀』が描く大津皇子像と謀反事件については、①『日本書紀』大津皇子伝の意図—『詩賦之興、自大津始也』の意味—（『日本文学研究ジャーナル』十四号、古典ライブラリー、二〇二〇年六月）、②「性頗る放蕩にして法度に拘らず—『懷風藻』大津皇子伝前半部における人物造形—」（『京都語文』二十八号、二〇二〇年十一月）、③「太子の骨法これ人臣の相にあらず—『懷風藻』大津皇子伝後半部における行心の『註誤』—」（『文学部論集』一〇五号、二〇二一年三月）の一連の拙稿において論じてきた。①では、主に『日本書紀』の大津皇子伝に焦点をあてて、大津皇子を理想の知識人として造形していることを論じている。②③では、『日本書紀』においては、知性の高いエリート皇子が自らをとりまく多くの知識人を「註誤」して起こした謀反事件だという解釈が示されるのに対して、『懷風藻』では、放蕩な性格故に多くの人を引き寄せ、その中の一人である行心に「註誤」された大津皇子が、無用の謀反を起こして天命を遂げずに滅んだ事件だという解釈が示されていることを論じている。

(17) 中西進「引喩としての典故」（『万葉と海彼』角川書店、一九九〇年）。

(18) 『日本書紀』の大津皇子伝については、前掲注（16）拙稿①で論じた。

(19) この点については、前掲注（16）拙稿①でも触れた。

(20) 中西進氏は、前掲注(17)論文において、書紀編者が景帝詔を踏襲したのは、「大津を漚になぞらえ、事が酌量されるべき運命的な反逆であったことを主張」する意図があったためだと論じている。しかし、中西氏が指摘する漚と大津皇子との共通点は、「懐風藻」大津皇子伝に基づくものである。『日本書紀』の大津皇子像には、王族に連なる立場で、かつ乱を首謀して平定されたというものを除いて、漚と重なる点は見出されない。前掲注(16)の拙稿で論じてきた通り、『日本書紀』と『懐風藻』はそれぞれ異なる大津皇子像を造形し、謀反事件に対する異なる解釈を示している。成立時期や書物の性格が異なるのであるから、『日本書紀』と『懐風藻』の意図はそれぞれ別個のものとして考える方が適切であろう。『日本書紀』の編者は、大津皇子と漚という個人と個人を重ね合わせるよりも、大津皇子謀反事件の歴史の意味を、漢王朝における呉楚七国の乱の意味に重ね合わせて考えることを意図しているのではないかと思われるが、この点、稿を改めて論じたい。

(21) 大伯(来)皇女の六首については、大伯(来)皇女が斎宮であったことの意味を考える必要があると思っている。俗世の一切を断ち切った神に仕えるべき斎宮としての立場と、弟の人目を忍ぶ訪問を受け、弟の不在を嘆く行動との間には、齟齬がある。大伯(来)皇女歌群には、大津皇子歌群とは異なる問題があるように思われる。稿を改めて論じたい。

(22) 伊藤博氏は、「歌群の物語性」(『万葉集の表現と方法』上) 塙書房、一九七五年)において、「すこぶる異常な状況」で、「二人の関係がとくに人目を忍ばねばならぬ只ならぬ中であつたことが匂わされている」と述べている。

(23) 一〇七―一〇番歌については、馬場朋子「石川女郎をめぐる二皇子の歌―大津皇子物語の形成過程」(『古代研究』三十一号、一九九八年一月)で論じたことがある。

(24) 郎女と女郎については、神田秀夫「嬢子」と「郎女」(『古事記の構造』明治書院、一九五九年)、藤原芳男「万葉の郎女」(『萬葉』一九

六三年一月)、山田英雄「万葉集の女郎・郎女・大嬢・娘子」(『文学』平成元年十二月)を参照。

(25) 高木博氏が「二上山の残照」(『万葉宮廷の哀歌』東京堂出版、一九七七年)で、石川女郎が「小野小町にも劣らぬ歌才と豊富な話題を伴って伝承された」のではないかと論じている。

(26) 土佐秀里氏が「聖徳太子の悲傷歌と大津皇子の流涕歌―卷三挽歌冒頭の形成と構想―」(『國學院大學紀要』六十卷、二〇二二年二月)で、有間皇子自傷歌における「磐代の結び松」に対して、大津皇子の末期の目に映った土地の景物として「磐余の池に鳴く鴨」が選び取られたのではないかと論じている。

〔附記〕

本稿は、科研費基盤研究C採択課題「勅撰三集を中心とした日本古代漢詩文の文献学的研究」(課題番号一九K〇〇三四二)の助成を受けて行った研究成果の一部である。

(とさ) ともこ 日本文学科

二〇二二年十一月十五日受理

